

テレビ討論における前置き表現—「ポライトネス」の観点から⁽¹⁾—

テレビ討論における前置き表現
—「ポライトネス」の観点から⁽¹⁾—

大 塚 容 子

Prefaces Used in the Discussion in a TV Program
—In Terms of Politeness Theory—

Yoko Otsuka

Abstract

The paper presents the prefices used in the discussion in a TV program in Japanese. It is natural that people should express their own opinion in the discussion without any hesitation. In Japanese, however, many prefices, hedges, indirect expressions and so on are used, when objections are raised in discussion.

To summarize, the prefices are used in both ways showing one's approval and making an objection. The use of prefices reflects the possessing "politeness" in mind. Making an objection to someone means "Face Threatening Act;" nevertheless we often have to make an objection. In this case, we show our concern of "politeness" by saying that "To tell the truth," "If I may ask," and so on.

Received Sept. 28, 1998

Key words

discussion, strategy, modality, hedge, politeness

は じ め に

言語はコミュニケーションの道具である。言語を用いてお互いに意志の疎通を図っている。話し手の伝えたい内容が聞き手に対して利益をもたらす場合にはあまり問題は起こらない。しかし、その内容が聞き手を不快な気持ちにするということが話し手に予測できる時には、話し手はその不快感をできるだけ軽減するような方法を用いて伝えようとする。いわゆる「会話のストラテジー」⁽²⁾である。例えば、パーティーへの招待を断る場合、「お誘いいただいて大変うれしいのですが」といった、誘いに対するお礼から始めることが多いだろう。前置きなく断ると相手の不快感が大きくなる。そこで、まずお礼を言うという前置きをしてか

ら、断りに入るのである。

ところで、このようなストラテジーは日常会話だけではなく、討論というお互いの意見の対立が明らかな状況でも使われているのであろうか。日常会話であれ、討論であれ、そこに参加するのは人間であることに何ら変わりがない。相手ができるだけ不快な気持ちにさせずに、反対意見を述べたり、自分の主張を通すためにはそれなりのストラテジーが必要かもしれない。しかし、お互いに意見を述べることを主目的とする討論という場面において、反対意見を述べる時に何らかのストラテジーが使われているとすれば、その理由は何なのであろうか。

本稿では討論という場面で使われる「前置き表現」を「ポライトネス」の観点から考察する。まず、日本語での討論、前置き表現、ポライトネスについて論じる。次に、テレビの討論番組で使われた前置き表現を紹介する。最後に、日本語の討論場面における前置き表現の機能について考察する。

1. 日本語での討論

近年、討論はさまざまな観点から研究が行われている。討論を対面相互行為の一つと見なしして日本語でのテレビ討論を分析した本田（1997）は、日本語では反対意見を述べる時、意見を直接提示するのではなく、さまざまな緩和マーカー（前置き表現、文末表現、間接表現を含む）が使用されると述べている。また、武黒（1998）は「ディスコース・フレーミング」という観点から日本語と英語の討論番組を分析し、日本語では「意見の初めや反対意見の表明には、言い訳・前置き表現などのモダリティ要素が不可欠である」（p. 83）と報告している。

討論とは、『広辞苑』によれば「事理をたずねきわめて論ずること。互いに議論をたたかわすこと。」とある。お互いに自分の意見を述べるのが本来の目的であるが、日本人の話し手による討論は、意見をそれのみ述べることはできないようである。自分の意見、特に反対意見を述べる時には何らかのストラテジーが必要になってくるのである。

2. 前置き表現

2. 1. 会話のストラテジーとしての前置き表現

意見を述べる時にはどのようなストラテジーが必要なのであろうか。日本人がコミュニケーションをする時にどのようなストラテジーを用いているかは、日本語を母語として獲得した者にはなかなか意識されにくいものである。畠（1988）は外国人に対する日本語教育の中で「会話教育の中心はやはりストラテジー教育である」（p. 110）とし、日本語会話ストラテジー

テレビ討論における前置き表現—「ポライトネス」の観点から⁽¹⁾—

として24の技術を提示している。これは外国人が日本人と円滑なコミュニケーションを図ろうとする時に必要なストラテジーである。外国人が学ばなければならないということは、逆に言えば、日本人が日常使用しているストラテジーだと考えることができる。24の技術の中から「意見を述べる」ことに関係するものを以下に示す（カタカナ表記は具体例で、原文のまま示す）。ただし、これらは一般的な日本語会話のストラテジーであって、討論のためのストラテジーとして挙げたものではない。

(1) 「意見を述べる」ことに関係するストラテジー

a. 反対意見を切り出す技術

①原則——反対意見は直接はっきり言わないことを原則とする。ソフトニングが必要である。ただし、くだけた場面ではこの限りではない。

②まず相手の意見に賛成して次に反対意見を言う（ヨクワカリマス ケド、サンセイデス シカシなど）

③相手の意見の一部に賛成しながら反対意見を言う（ソレハソウデスガなど）

④はっきり、直接言う（ソレハチガイマス、ソレハダメダなど）

b. 重要な発言を切り出す技術

①原則——直接言わずに、前ぶれを置く（コレハイツモカンガエティタコトナンデスガ、モシカスルトサンセイシティタダケナイカモシレマセンガなど）

（畠（1988），p. 112）

(1)からわかるように、反対意見を述べる時には、もちろん反対であることを直接述べるという方法もあるが、直接的には表現しないのが日本語の原則で、その場合には「率直に申し上げますが」といった前置きが必要となる。特に重要な発言をする場合には、前ぶれを置くことが原則である。

このような本題に入る前に現われ、コミュニケーションを円滑に進めるためのストラテジーとして使用される表現を「前置き表現」とする。

2. 2. モダリティとしての前置き表現

意見を述べる時に用いられる前置き表現は、ストラテジーであるから、相手に伝えるべき内容（命題内容）そのものに言及するものではなく、意見の言い方、あるいは意見の内容に言及するものである。従って、このような前置き表現は武黒（1998）が述べているように、命題の外にある、モダリティと考えることができる。中右（1994）の分類に従えば、Dモダリティになる。

中右（1994）は、認知意味論の観点から文の意味を命題内容とモダリティに分類し、さらにモダリティをSモダリティとDモダリティとに分類している。Sモダリティは命題内容に対する話し手の態度を表わし、Dモダリティはある談話における、発話に対する話し手の態

度を表わす。DモダリティはSモダリティを包み込んで、発話全体の様式、その内容を限定するものである。そして、Dモダリティは談話（テクスト）形成のモダリティ、発話様態のモダリティ、情報取り立てのモダリティ、対人関係のモダリティ、感嘆表出・慣行儀礼のモダリティに下位分類される。ここで注意しておきたいのは、発話様態のモダリティである。発話様態のモダリティの働きは、「直後に続く話し手自身の発話行為を限定し、発話内容や発話様式について前書き・但し書きなど、なんらかの留保条件を言い添える」（同書、p. 60）ことである。以下に例を示す。

(2) 発話様態のモダリティ表現

率直に言って、大雑把に言って、まじめな話、内緒の話だが、正直なところ、極論すれば、包み隠さず言えば、手前味噌だが、自慢じゃないが

（同書、p. 60）

これらの表現が発話行為に関することは、その多くに「言う」という発言の動詞が使われていることからも明らかである。直接「言う」という動詞が存在しなくとも、例えば「自慢する」という動詞には意味論的に「発言する」ことが含意されているし、「手前味噌だが」は「自分で自分のことをほめるが」という意味になることを考えれば、やはり「ほめる」にも発言することが含意されている。

ここで、前節で反対意見を述べる時のストラテジーとして挙げられている表現について考えてみる。「お話はわかりますけど」や「それはそうですが」といった表現は、話し手が反対意見や自分の主張を述べることを聞き手に予測させる。それは文法的には対比の「ハ」や接続助詞の存在による。例えば次のようになる。

(3) a. お話はわかりますけど、消費税はやはり将来、福祉目的税化したほうがいいと思います。

b. それはそうですが、消費税はやはり将来、福祉目的税化したほうがいいと思います。

(3)が示しているように、前置き表現と後続する話し手の意見との間には、論理的関係はない。これらの表現はそれぞれ「お話はわかりますけど、私の考えを言うと」「それはそうですが、はっきり言って」などという意味を表わしていると解釈できる。従って、Dモダリティを表わしていると考えることができる。

2. 3. 語用論から見た前置き表現

前置き表現は語用論的には“Hedges”（生け垣表現）と捉えることができる。Yule (1996)によれば、生け垣表現は、“Cautious notes expressed about how an utterance is to be taken” (p. 130) と定義されている。生け垣表現は文頭だけでなく、文中、文末にさまざまな形式で現われる。文頭に現われるものとして次のような例がある（日本語訳は筆者による）。

テレビ討論における前置き表現—「ポライトネス」の観点から⁽¹⁾—

(4) 生け垣表現

- a. As far as I know (私の知るかぎり)
- b. As you probably know (多分ご存じのように)
- c. I don't know if this is important (重要じゃないかもしませんが)
- d. I'm not sure if this makes sense (意味がないかもしませんが)
- e. frankly (率直に言って)
- f. to be honest (正直に言うと)
- g. I hate to have to say this, but (これは本当は言いたくないことなんですが)

(Yule (1996), pp. 38-9)

(Brown & Levinson (1987), pp. 171-2)

(4a)～(4d) の生け垣表現は、Grice (1975) の「会話の公理」⁽³⁾ に関する表現である。(4a) は、話し手は「質の公理」を遵守して発言したいのだが、それに違反する可能性があることを述べた表現である。同様に、(4b) は「量の公理」、(4c) は「関連性の公理」、(4d) は「様態の公理」に違反していることを述べている。

(4e)～(4g) は発話の様式、内容について述べているので、まさしく発話様態のモダリティである。

(4a)～(4d) の生け垣表現の存在が、人間がコミュニケーションをしようとする時、いかに会話の公理を遵守しようとしているかを示していると考えることができる。では (4e)～(4g) の場合はどうなのだろうか。これらは Brown & Levinson (1987) が述べているように、ポライトネスに関する生け垣表現である。

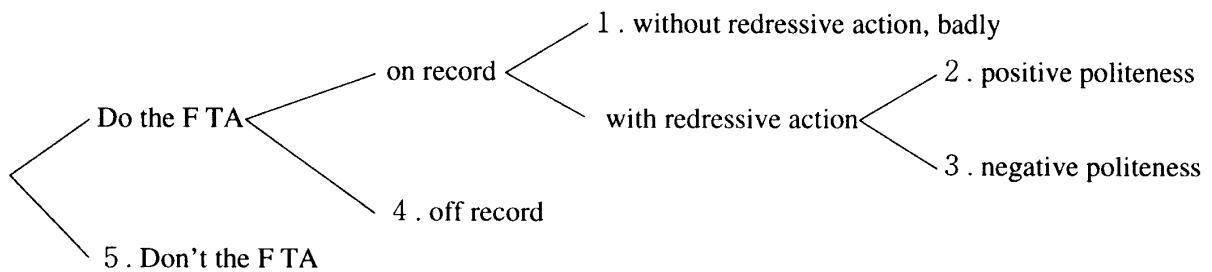
3. ポライトネス

ポライトネスに関する理論は Leech (1983), Brown & Levinson (1987), Thomas (1995) などによって展開されている。ここでは、ポライトネスをストラテジーとして捉えている Brown & Levinson (1987) の理論を採用する。

ここで扱うポライトネスとは、日本語の丁寧表現や敬語のように、話し手と聞き手との上下関係によってその使い方が決定されるものではなく、「人間関係を維持するための社会的言語行動」(生田 (1997), p. 66) のことである。Brown & Levinson (1987) は Face (面子) という概念を使ってポライトネスの理論を展開している。彼らのいう面子とは、人間一人一人が主張したい社会的な自己イメージのことで、Negative Face (消極的面子) と Positive Face (積極的面子) という二つの面をもつ。消極的面子は他人の行動に邪魔されたくないという願望、積極的面子は人からよく思われたいという願望である。そしてこれらの面子を傷つける恐れのある行動を face-threatening acts (面子威嚇行動, F T A と略記) と呼ぶ。円満な人

間関係を保持し、円滑なコミュニケーションを図るためにF T Aによる面子の威嚇度を最小にとどめるようなストラテジーをとればいいわけである。

(5) F T Aを行うストラテジー



(Brown & Levinson (1987), p. 69)

(5)からわかるように、FTAを行うためには五つのストラテジーがある。1. はFTAを直接行うことである。2. は相手の積極的面子を斟酌した方法をとること（積極的配慮）、3. は相手の消極的面子を斟酌して行うこと（消極的配慮）である。4. は比喩や皮肉を使って間接的に表現すること、5. は全くFTAを行わないということである。積極的配慮の基本的考え方は話し手と聞き手が同じ立場に立っていることを示したり、話し手と聞き手が協力者であることを伝えたりすることで、15種類のストラテジーがある。消極的配慮は相手の自由を奪わないような表現方法をとることなどで、10種類のストラテジーがある。以下にこれらのストラテジーの一部を示す。

(6) 積極的配慮によるストラテジー

- a. 合意点をさせ。
- b. 否定を避けよ。
- c. 共通点を主張せよ。
- d. 楽観的な態度をとれ。

(7) 消極的配慮によるストラテジー

- a. 間接的な表現を使え。
- b. 疑問文や生け垣表現を使え。
- c. 聞き手に対する負担を最小限にせよ。
- d. 一般的な事柄として述べよ。

前置き表現は(7b)に当たると言えよう。

4. 討論場面に使用される前置き表現

データは、1998年8月9日に放映されたテレビ番組「サンデープロジェクト」⁽⁴⁾（テレビ朝日）の討論場面（約50分）を文字化したものである。出席者は司会者1名、与党議員3名、

野党議員4名で、小渕総理の所信表明演説の内容について話し合われた。与党、野党の間には当然のことながら意見の対立が存在しているが、野党議員4名も異なった党の代表であるため、意見の対立は存在する。ここでは、同意を表明する時、反対意見を述べる時、意見を求める時、質問に答える時の前置き表現を中心に考察する。

4. 1. 同意を表明する時

相手の発話内容に対して同意を示すことは相手に対して不利益をもたらすことではないので、相手の面子を特に気にする必要はない。従って、特に前置き表現を置く必要もない。しかし、相手に同意することを直接述べることは少なく、「A氏がおっしゃったように」という表現⁽⁵⁾を用いたりすることが多いようである。これは相手の積極的面子に配慮した表現（ストラテジー（6c）に当たる）である。

- (8) [野党D氏⁽⁶⁾の、公共事業が必要か否かよりもその中身を検討する必要があるという発言に対する、与党A氏の発言]

・・・ですから、私はね、先程Dさん、Dさん言われたように、やっぱり中身を吟味して、21世紀のために必要なものはやっぱり、やるべき時はやらなきゃいけない。しかもそれが、あのう、景気対策になるのであれば、これはもう自信をもってすすめる。中身なんですから。

与党・野党という立場の違いが明白な場合、相手の意見に賛成することを直接に表現することは難しい。その時、この表現は非常に有効に働くようである。

- (9) [将来の税制を総合的に考えるべきではないかという司会者の質問に対する与党B氏の発言]

司会者：Bさん、どうですか。

与党B：私もそう思います。さっきDさんが言われたように、消費税の問題とか、あるいはさっき言った、所得税のあり方、直間比率の問題とか（...）そういった全部の国民負担がどうあるべきか、サービスとの関係でどうするかとか、これはきちんと描いて、日本の国は将来こういうふうになるんだ、ということを示すべきでしょうね。

与党B氏の最初の発言「私もそう思います」は司会者に向けられたものである。野党側の意見に同意を表明する時は「Dさんが言われたように」が用いられている。

- (10) [野党F氏の、消費税を目的税化（基礎年金、高齢者医療、介護に使用する）するべきだと言う発言に対する、野党D氏の発言]

・・・で、ま、これは使いみちは今おっしゃったように、私たちも福祉目的税的に、それは使うべきだと、こう思っております。

野党間にも意見の違いはあるのだが、野党間の場合は同意の表明は幾分積極的にできるよう

で、「私たちも」という表現も登場する。

次の例は与党間のものである。与党C氏は与党の出席者の中で最も年少である。いわゆる先輩議員の面子に配慮した発言である。

(11) [課税最低限を下げるか否かという司会者の質問に対する与党C氏の発言]

その、フラットの税制をどうやって作っていくかという時にですね、その、始まりがでっぱってるわけですから、あのう、そこは下げるを得ないことになるけれども、Bさんがおっしゃられたように、先も言ったんですけど、今、地方にお金を流すパイプは税と公共事業しかないわけです。で、これから社会福祉ってものを考えていくんですけれども、この中で、今、経済がこれだけ疲弊している時、あるいはこれから不良債権の処理が起こることによってデフレ圧力が強まりますよね。その時、この、増税するってことはできないってことをBさんもAさんも言われてるわけです。

直接的な表現が使われている場合もある。簡単に解決できるような内容の時には、同意表明が直接行われている。

(12) [将来増税なのか減税なのかという司会者の質問に対して]

野党E：あの、社会保障費と、税と合わせた国民負担というのは、高齢化が進んでく
わけですから、そんななかで、下がるなんて、そんな嘘つけないですよ。

司会者：ね。減税やるわけない。

与党A：50%越えるんですか。

野党E：50%は越させるべきではないと思います。

与党A：そこ、その点ではH党と同じです。

また、討論が進んで与野党間の合意点がある程度見えてきた段階では、直接表現が使いやすくなるようである。

(13) 与党C：私たちの考え方、だいたい共通してて、間接税のあり方を、消費税って形をやめて、社会福祉にウエイトを置いた、税に変えてこうってことは、きっとコンセンサスは他党は全部できると思うんですけども、保険料を上げてくる、保険料で取るという考え方もあるけれども、やっぱりこれからの社会福祉っていうものは、きっと間接税で取っていくってことで、どんな提言ができるとも、コンセンサスを私は得ていくんじゃないかと思うんです。

4. 2. 反対意見を述べる時

ある人の発言に対して反対意見を述べるということは、その人の面子を脅かす恐れのある(F T Aを行う)ことである。従って、反対意見を述べる時には相手の消極的面子に配慮した表現が必要になる。

司会者はその討論会の進行を司るという任務を負っているので、司会者と出席者とに分け

て考察することにする。

4. 2. 1. 司会者の場合

次の発言は小渕氏の所信表明演説に対する野党の意見を聞いた後のものである。(14), (15)の前置き表現は発言内容に言及したものである。(16)は後半部分は挿入句のようになっているけれども、全体を前置き表現と見なすと、発言様式と内容の両者に言及したものである。前置き表現を使用しているとはいえ、この司会者は野党出席者に対してかなり強いFTAを行っていることが窺える。

(14) 司会者：今ね、僕がなぜこんな絡んでいるかと言うとね、

野党G：はい。

司会者：またどっかの週刊誌に酔っ払いって書かれるかもしれないけども、その、あの、私はこの間の小渕さんの所信表明を聞いて、そして、各野党のそれに対する反応を聞いて、がっかりした、野党の反応に。どれもリアリティーがない。

(15) 野党にはっきり文句言って申し訳ないんですが、あのう、もっとビツとしたこと言ってくれないと。

(16) 僕は、あのう、自民党が負けたのは、銀行に、はっきり言って、あのう、絡んでるじゃないですよ、やっぱり負けたのは、はっきりね、野党が減税減税って言って、で、自民党が減税にのろうとした。のろうとしたが、腹が、腰が据わってないんで、やるのかやらないのか訳がわからなくなっちゃったんだよ。それが一番の負けた原因ですよ。

4. 2. 2. 出席者の場合

出席者はそれぞれ国会議員という共通の立場にあるため、司会者のような攻撃的なFTAは控えている。

(17) [小渕氏の所信表明演説に対する野党側の評価が低いのに対して]

司会者：Aさん、この、小渕さんの何点。

与党A：え、ええ、ま、80点から90点。

司会者：それは高いね。

与党A：あのう、率直に言ってね、

司会者：しゃべりがへたくそ。そこで、あのう、何て言うの、この、こういうことをね、統合性がない。

与党A：いや、まず最初に申しますとね、非常に具体的にものを言っておられる。

...

(18) [野党G氏が法人税について正しく理解していないと思われる発言をしたのに対して、与党A氏が発言]

はっきり申し上げますけどね、あの、国民所得に対するね、法人税と個人所得税のね、あのう（…）はね、日本がね、13.1、アメリカが15.8、イギリスが15.9、ドイツが15.4というふうにですね、これはね、いや、低いというよりだいたい同じになってるんです。

(17), (18)は発話様式に関するものである。(17)は野党側の低い評価に対する反論の冒頭部分で用いられたものである。(18)の発話そのものは野党G氏の発言内容が間違っていることを指摘するもので、その前置きとして「はっきり申し上げますけど」という表現が使われている。

- (19) [野党E氏が社会保障に税金を使えば景気回復の一助になるという発言に対し、与党B氏が継続できなければ意味がないと発言。その発言に対する野党E氏の発言]
あの、若干誤解あるかもしれませんが、お金だけ流せばいいという話ではなくて、むしろ、サービスの方が大事だと思う。…

この例は発話内容に関する前置き表現である。与党B氏が野党E氏の発言を誤解しているようだったので、その訂正をするために行った発言である。従って、この前置き表現は野党E氏の以前の発話内容に対するものである。これを言い換えると、「私が以前にした発言に対して若干誤解があるようですが、本当のところは…」となるであろう。

前置き表現のほかに、反対意見を述べる時に用いられたストラテジーがある。

- (20) 野党E

基本的には全体としては、将来に対する安心というものがあれば、先程A先生がおっしゃった、基本的に今、貯蓄をもってるので、それを安心して使おうという方向に、インセンティブが働いてくと。それがなければもう景気は回復しないと僕は思っています。

- (21) 与党A

その議論をやる場合に、やっぱり、Eさんがさっき言われたね、その社会保障負担との関係をね、どうするのか、そこの問題を考えなきゃ。

- (22) 野党D

あのう、確かにですね、定率とね、定額とはそれぞれプラス・マイナスあると思うんです。だから、今まで定額でやった。それは今おっしゃったように具合の悪い面もあったが、やはりそれで潤った面もあるわけです。それは…

これらの例はいずれも反対意見を述べているものである。3例に共通していることは、他者の発話を取り込み、それを土台にして自分の意見を述べようとする態度である。これは相手の積極的面子に対する配慮である。このような表現を用いることによって、対立点が明確になるのを避けることができる。

テレビ討論における前置き表現—「ポライトネス」の観点から⁽¹⁾—

4. 3. 意見を求める時

司会者は討論を進行させるという任務を負っているので、新しい話題を提示したり、質問したりする時に、さまざまな前置き表現を用いる。ここに示す例はすべて司会者の発言である。

- (23) [野党D氏が消費税を福祉目的税的にすべきだという発言をしたのに対して]
古い話で本当に申し訳ないんですが、細川さんが例の消費税、消費税じゃなくて、国民福祉税という名前で、7%にしようとした時に、Dさんの政党は、賛成でしたよね。
- (24) Cさん、一番若いんで、一番率直に聞きたいんですが、その、課税最低限、どうですか。
- (24)の「率直に」という副詞は話し手側の「聞く」を修飾するのではなく、聞き手側の「答える」を修飾すると考えられる。(24)は次のように言い換えることができるからである。
- (24') Cさん、一番若いんで、率直に答えてくれることをお願いするんですが、(23), (24)は相手の消極的面子に配慮した表現であると考えられる。なぜなら、古い話を持ち出すことは相手にとって不愉快なことかもしれないし、質問内容が率直には答えられない事柄である可能性もあるからである。相手の、他人に邪魔されたくないという願望（消極的面子）に抵触するわけである。

次の2例はかなり攻撃的な質問である。

- (25) あのね、ちょっと失礼ですが、Gさん、ここに出ていらっしゃるってことは、当然そういうことはちゃんと詳しく知ってらっしゃるんですね。
- (26) あまりI党いじめること、好きじゃないんだけども、ちょっとお聞きしたいけども、そのね、あの、高齢化社会になる。働く人間がどんどん減っていってる。そういう中で、I党は、そのう、間接税、消費税を減らしてしまえば、一部の働く人にドーンと税金がかかるわけだ。

(25)は確認である。(26)は質問の形になっていないが、発言意図は「働く人間がどんどん減っている時に、消費税を減らしてしまえば、一部の人に税金がかかることになる。そのような時に、消費税を廃止しようとするのですか。」である。いずれも発話内容に対する前置きである。

4. 4. 質問に答える時

次の例は、野党E氏が司会者に日本は将来減税か増税かと質問された時に用いた前置き表現である。

- (27) あの、私の私見ですけども、あの、トータルとしての、社会保障費まで含めた、全部合わせた国民負担というのは、今より大きくなると思います。

これはポライトネスというより、「会話の公理」に関する前置き表現である。またDモダリティではなく、話し手の命題内容に対する判断を表わすSモダリティである。質問内容が慎重を要するものであり、かつ、党の代表として番組に出席しているという立場を考えると、この前置き表現の存在は大きい。

5. 考察

討論で使われた前置き表現を見てきた。もう一度「ポライトネス」の観点からこれらの前置き表現について考えてみたい。

まず、日本語では、自分の意見を主張することが当然のこととして認められるような場面においても、意見を直接述べるのではなく、前置き表現を用いて意見をあたかもオブラートに包んだかのようにして提示していることがわかる。これは賛成意見を述べる時にも例外ではない。「その意見に賛成です。」とか「その点は同じです。」といった直接表現はまれで、「A氏がおっしゃったように」という表現が用いられている。この表現に敬語が使われていることからも明らかなように、これは相手の積極的面子に配慮し、できるだけ合意点を捜し、共通点を強調しようとするストラテジーである。もう一つ、この表現を使用することの有効性は、後続する自分の意見と相手の意見とが完全に一致していないてもよいということである。とりあえず、相手と何らかの共通点があることを示しているのであるから、相手の面子を保つつつ自分の意見をある程度自由に述べることができるわけである。そして、相手と自分の意見との差が大きくなると、反対意見における「A氏がおっしゃった」という関係節の使用に変化していく。賛成意見、反対意見は相手に伝える内容は全く異なるが、ポライトネスに関する基本的考え方は共通していると思われる。

次に反対意見を述べたり、相手にとって答えにくい内容の質問をする場合である。このような時に用いられる前置き表現は、表現そのものが相手の消極的面子を傷つける恐れのあるものである。⁽²⁵⁾での「ちょっと失礼ですが」はその代表的な例である。

発話様式に関する前置き表現の使用は、それが相手の消極的面子を脅かすことになるという意識があることによる。その意識があるからこそ、あらかじめ「率直に言う」とか「はっきり言う」ということを断わることによって、相手の消極的面子に対して配慮していることを示すのである。率直に言うことは相手の面子を傷つけることになる、しかしこの場合どうしても言わなければならないという心理との間に葛藤が生じた時、前置き表現を使って侵害度ができるだけ小さくしようとする。何も言わなければ、消極的面子に対して無関心であるということになるからである。

発話内容に関する前置き表現の場合は、その発言によって生じる推論を先取りして述べることによって、消極的配慮を表わしていると考えることができる。例えば⁽¹⁵⁾を例にとって考

テレビ討論における前置き表現—「ポライトネス」の観点から⁽¹⁾—

えてみる。「もっとピっとしたこと言ってくれないと（困る）」という発言をしようとする。その発言によって、聞き手がこの話し手は聞き手に対して文句を言おうとしていると推論するだろうと予測する。そして、その推論が聞き手の消極的面子を脅かすことになると考えられる時、その推論を前置き表現として先に述べることによって、消極的面子に対する配慮を示すわけである。(14)の場合も同様である。話し手は、発言を聞いた相手が「そんなことを言うと、またどこかの週刊誌に酔っ払いと書かれるかもしれない」と推論するだろうと考える。その推論を先取りして述べているのである。ここにも発言することと、ポライトネスに従おうとするとの間に葛藤が生じている。特に、テレビ討論の司会者の場合は視聴者の存在を意識し、何とか出席者から本音を引き出そうとする。あるいは、視聴者の意見の代弁者になったりする。そのような場合には、(25)～(26)の例のように、かなり大きなFTAを行うことになる。FTAであることを発話者が意識していることを、前置き表現によって示すのである。このように考えると、発話行為の前置き表現はポライトネスに従おうとする意識を言語化したものであると考えることができる。ポライトネスに従おうとする意識があるからこそ、FTAであることを表明するのである。

意見を述べることが求められるような場面であっても、このように前置き表現が使用されていることを見ると、日本語母語話者のコミュニケーションに対する考え方方が浮かび上がってくる。相手に率直に意見を述べたり、はっきり自己主張すること、また相手に率直に質問したりすることは、日本語母語話者にとっては相手の面子を脅かす恐れがあることになり、あまり好ましいことではないのである。討論の間に、司会者が反対意見を述べることを躊躇している出席者に対して、次のような発言をしていることも、日本人のそのような態度の表われと言えるだろう。

(28) はっきり言ってください。

コンテクストの上では、このように司会者に促されなくても、意見を述べてもいいはずなのである。

対立点が明確になるような発言をしたり、そのような発言を求めたりすることは、相手をいじめている、あるいは文句を言っていると解釈される。従って、対立点を避け、できるだけ共通点を見つけながら、コミュニケーションを図ろうとする。このことは、同意を表明する時にはもちろん、反対意見を述べる時にも「A氏がおっしゃったように」という表現が多用されることからもわかる。

『広辞苑』によれば、「討論」という言葉は明治10年代から、英語の“debate”の訳語として用いられるようになったとあるが、日本語における討論は、日本語のもつ言語文化、すなわちHall (1976) のいう、高文脈依存文化の中に存在する討論と言えるだろう。意見を明確に伝えることが討論の最大の目的である英語（武黒（1998））とはそのあり方が違うのである。佐藤（1996）が述べているように、日本語では「それぞれが独自の意見を必ずもってい

るというよりもしろ話し合いで皆が一つの意見を共有し、共に作りあげていく」(p. 10) というのが討論の姿なのである。高文脈依存文化では、話し手と聞き手が共有する情報を確認し合うことのほうが、対立点を明確にするより心地よいのであろう。日本語での討論は他者と意見を戦わせるのではなく、上記のような心地よさと、意見を述べなければならないという緊張感との間の精神的戦いと言えるかもしれない。

終わりに

本稿では日本語のテレビ討論で使われた前置き表現をポライトネスの観点から分析した。発話行為にかかわる前置き表現は、ポライトネスを守ろうとする精神の表われであると考えられる。このような態度は控えめであることが美德とされる日本社会では評価されることであろう。しかし、異文化間コミュニケーションという枠組みで見た時、それは必ずしもコミュニケーションを円滑に進めるためのストラテジーとして機能しないかもしれない。日本人が国際社会で活躍していこうとする時、どのようなストラテジーをとるべきなのか、考えなければならない時期にきているのではないだろうか。

注

- (1) この研究は小山（1998）に負うところが大きい。
- (2) 「会話のストラテジー」を明確に定義するのは難しい。畠（1988）も明確に定義しているわけではないが、その基本的考え方従い、「円滑なコミュニケーションを行うための、語彙・文法に関する知識以外の何か」と考えておく。
- (3) Grice (1975) は会話は協調の原理 (Cooperative Principle) の下に取り交わされているとし、その上で四つの公理を設定している。

On the assumption that some such general principle as this is acceptable, one may perhaps distinguish four categories under one or another of which will fall certain more specific maxims and submaxims, the following of which will, in general, yield results in accordance with the Cooperative Principle. Echoing Kant, I call these categories Quantity, Quality, Relation, and Manner. (p. 45)

- (4) 「サンデープロジェクト」はNHKの「日曜討論」ほど形式的ではない。比較的反対意見が述べやすい状況である。
- (5) 同意を表明する時に用いられる「A氏がおっしゃったように」と言う表現は「A氏がおっしゃったのと同じ内容のことを申し上げますが」と言い換えることができる。このように解釈すると、ほかの前置き表現と同じように扱える。
- (6) 本稿の目的は誰が何を言ったかではなく、言い方に主眼点があるので、実名は避けることにする。与党議員はA, B, C氏、野党議員はD, E, F, G氏とする。党名はH, I党とする。

参考文献

- 『広辞苑』第三版（1983）岩波書店
- 生田 少子（1997）「ポライトネスの理論」『月刊 言語』26巻6号 大修館書店 pp. 66-71
- 小山 哲春（1998）「ポライトネスのストラテジーとしての日本語文末表現」第2回社会言語科学会研究大会
予稿集 pp. 5-10
- 佐藤安希子（1996）「日米の「グループの中で意見を述べる」談話の対照分析」日本言語学会第112会大会予
稿集 pp. 9-10
- 武黒麻紀子（1998）「日英語のディスコース・フレーミング—命題内容とモダリティー要素のかかわりー」日
本言語学会第116会大会予稿集 pp. 82-87
- 中右 実（1994）『認知意味論の原理』大修館書店
- 畠 弘巳（1988）「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」『日本語学』第7巻第3号
pp. 100-117
- 本田 厚子（1997）「日本のテレビ討論にみられる討論の分析—儀礼拘束としての緩和マーカーー」日本言語
学会第116会大会予稿集 pp. 246-249
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C.(1987 (1978)) *Politeness: Some Universals in Language Usage* (reissued).
Cambridge: Cambridge University Press.
- Grice, H. P. (1975) 'Logic and Conversation,' in Cole, P. and Morgan, J. L. (eds.), *Syntax and Semantics*, Vol. 3 :
Speech Acts, New York: Academic Press, pp. 41-58.
- Hall, Edward T. (1976). *Beyond Culture*. New York: Anchor Press.
- Leech, Geoffrey N. (1983) *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Thomas, Jenny (1995) *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*. London: Longman.
- Yule, George. (1996) *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press